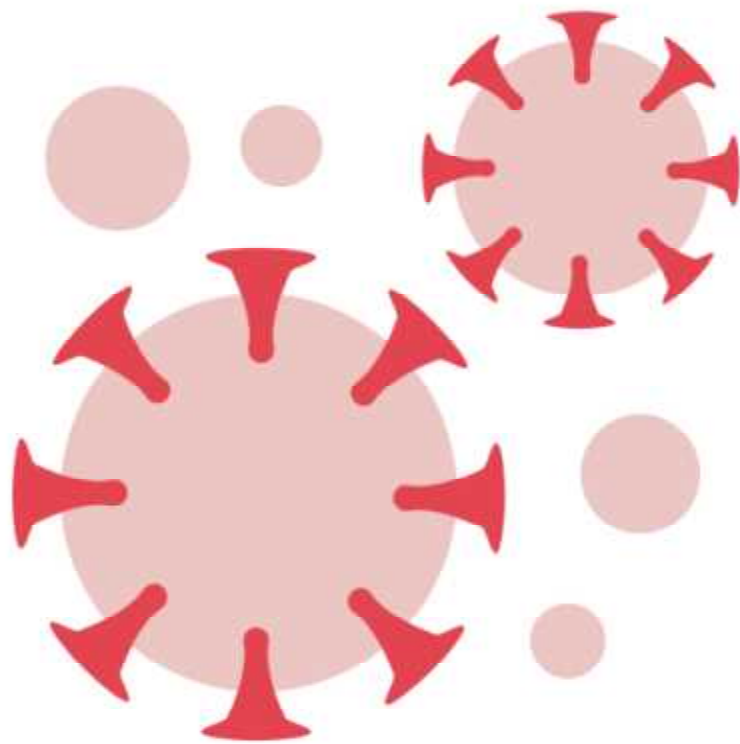


免疫とワクチンを知る



<https://www.seedlabo.jp/imm/>

大規模な人体実験が始まった

新型コロナパンデミックが始まってから1年以上が経ちました。アビガン、レムデシビル...と騒がなくなってきたと思ったら...今度は、ファイザー、モデルナ...です。そして、一日中、ワクチン接種のシーンが流されています。ワクチンの同調圧力も高まり、強要まで行われる始末です。接種を拒否して職場を解雇になるとか、接種から逃れるために退職するとか...

報道の内容も大きく変わってきました。以前は、抗体依存性感染増強など、ワクチンの懸念事項も報道されていましたが...ワクチン接種が始まってからは、メディアには、政府やマスコミの代弁者しか登場しなくなり、ワクチンの有効性だけが語られるようになりました。SNSなどへの規制(言論統制)も始まりました。検索エンジンも公的機関が上位に表示するようになってきました。こうして、真実が隠されていくわけです。戦前さながらです。

今回は、人類史上初めて試される遺伝子ワクチンです。安全性の検証さえ十分に行われていません。(特例承認)たとえば、ファイザーの第三相試験では、高齢者や慢性疾患がある人は被験者から除外されています。(臨床試験の高齢の参加者の割合は、65~75才が0.2%、75才以上が0.04%)注目すべきは、避妊(ピル内服など)している女性も被験者から除外されていることです。避妊は、エストロゲン投与が主になります。ファイザーもエストロゲンが、副反応の引き金になることは知っているのです。ちなみに、妊婦ではプロゲステロンが優位になり、新型コロナ感染症による死亡率は15倍低いと報告されています。(ワクチンの真実 秀和システムから)

米国では、去年からワクチン接種が始まっていますが...健康な人がワクチン接種後に急死するというケースは後を絶ちません。有名人としては、大リーグの英雄ハンク・アーロン氏が1月5日に、そして、ボクシングの元世界チャンピオンのマービン・ハグラ一氏が3月13日に亡くなりました。

そんな中、日本でも人体実験が始まりました。参加するか否かは、自らで決めなければなりません。その判断のためには、免疫やワクチンについての理解が必要です。そこで、ここに簡単にまとめていくことにします。

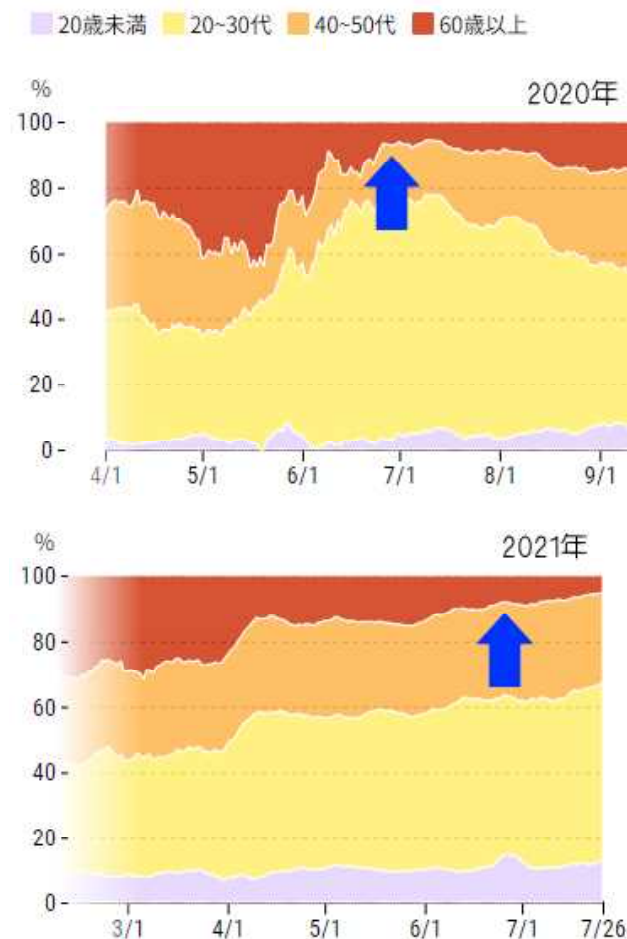
ワクチン効果あり？

ワクチン効果か 高齢者の感染減 東京で20%が6%に(2021年6月28日 FNNプライムオンライン)

東京都の感染者数について、重症化リスクの高い65歳以上の割合は減少傾向で、都の担当者は、ワクチン接種が進んでいることも一因ではと分析している。東京都の新規感染者のうち、65歳以上が占める割合を示したグラフを見ると、2021年3月ごろには、新規感染者の20%以上を占めていた65歳以上の割合が、6%台と減少傾向になっている。



これをもって、効果ありとし、大々的にワクチンのプロパガンダを行っています。



でも、去年のグラフと比較してみると...傾向は変わりません。

つまり、ワクチン接種の有無にかかわらず、夏場には、高齢者の感染は減少するという事です。

すぐに思いつくのは、高齢者は暑くなると外出を控える、若年者はアウトドアや夜遊びなど出歩く機会が増えると言うことです。これがニュースになっているのですから、いかにワクチンの効果が出ていないかを物語っています。

そもそも、この遺伝子ワクチンに、感染・重症化を抑えるというエビデンスはありません。本来なら承認もされない危険なワクチンです。また、ウイルスは、変異しながら淘汰圧(ワクチンや治療薬、マスクなど)から逃れたものが増殖していきます。生き延びるのに有利な形に(弱毒化し感染力が強まる)進化していくのです。ワクチン効果で、集団免疫獲得など、あり得ない話です。したがって、メディアは、大衆の恐怖心をあおり、同調圧力が高まるように仕向けるしかないのです。しかし、始まってしまったのですからもう引き返せません。人類の未来に、大きな禍根を残すことになるでしょう。

情報を鵜呑みにしない

新型コロナ感染症は、超過死亡数で見ても分かるように、決して怖い病気ではありません。(例年より、新型コロナが流行した年のほうが総死亡数が減っている)にもかかわらず、メディアは、日々の感染者数で人々の恐怖をあおっています。その道具として使われているのがPCR検査です。

感染者数といっても、これは実態を表したものではありません。(PCR陽性者数であって感染者数ではない)そもそも、PCR検査でウイルスに感染しているか否かは分かりません。分かるのは、対象のウイルス(遺伝子)の断片が有るか無いかだけです。感染力のあるウイルスの有無を調べているわけではありません。それも確実ではありません。ウイルスは、刻々と変異し構造が変わっています。また、類似の風邪ウイルスを、新型コロナと間違える可能性もあります。(遺伝子構造が未知の土着コロナもたくさんある)

PCR検査は、ウイルスの遺伝子の一部を増幅させ

て調べるというものです。その設定(増幅する倍数)によって、検出の精度を調節できます。日本のPCR検査では、高い検出の精度で運用されています。そのため、本来は陰性のはずが陽性にされる確立が高まります。なので、感染者といっても、そのほとんどが無症状(感染あるいは発症していない)です。それでも(偽陽性でも)、新型コロナ患者というレッテルを貼られることになるのです。そして、検査ビジネスが拡大し、メディアに恐怖をあおられた人々が、PCR検査に群がっています。そうやって、陽性者が増産されていくわけです。

死亡者数も同様に、PCR陽性者がコロナ患者(発症者)として扱われています。そして、亡くなっているのは、ほとんど高齢者で基礎疾患のある人です。したがって、持病の悪化により死亡した人も多く含まれるわけです。(コロナの発症にはかかわらず)

さらに、2020年6月から、死因にかかわらず、PCR検査が陽性であれば、新型コロナ感染死とされるようになりました。(糖尿病や心臓病、がん、老衰、事故、自殺など死因に関係なくということです)

<新型コロナ>県、死者65人に修正 感染者は死因問わず集計へ(2020年6月20日 東京新聞)

県(埼玉県)は十九日、新型コロナウイルス感染症の死亡者数に、十三人を新たに計上すると発表した。感染者でも医師が死因をコロナ以外だと判断した場合は「退院」に分類してきたが、厚生労働省から死因を問わず報告するよう求める通知があった。これにより、県は同日現在の死亡者数を五十二人から六十五人に修正した。(後略)

メディアは、良識者の言論を封じ込め、真実をデマとして覆い隠し、都合のいいデータだけを寄せ集め大衆を欺いています。表面化している情報は、何らかの意図を含んでいるのです。鵜呑みにせず、自らの頭で考え行動するようにしましょう。

薬剤で重症化を招く

恐怖心をあおられた人たちは、安心を求め薬剤に走ってしまいます。ワクチンの副反応を恐れて、薬局からアセトアミノフェン(カロナール)が消えたというくらいです。実際、感染者のほとんどが解熱剤(※1)を服用しているようです。本来、熱は、歓迎さ

れるべきものです。(免疫が正常な証拠)

解熱剤は、熱などの症状を抑えるだけです。(つまり対症療法)そのため、熱に弱いウイルスは活発化します。熱を下げるつもりが、かえって反動を生み、高熱を招いてしまうのです。40度を越えたとかいう場合は、たいてい解熱剤が使われています。

そして、熱を上げ下げして感染を長引かせ、重症化リスクも高まります。最悪、サイトカインストーム(免疫の暴走)を招いてしまいます。

病院では、サイトカインストームを抑止するのにステロイドが使われます。本来、ステロイドは、副腎の機能不全などで欠乏しているステロイドを補助的に補うためのものです。サイトカインストームの抑止はできません。ステロイドは、免疫を抑制する力が強く、使うタイミングをひとつ間違えると致命的です。インドでは、新型コロナ感染者(回復後も)に、ムコール症(真菌感染症)が多発しています。ムコール症は、身体にカビが生える病態です。(致死率は50%と高い)これは、ステロイドの乱用によるものと考えられます。免疫を抑制したことにより、カビなどの感染を抑えられなくなったのです。放置すると、感染が広がりますので、眼球や顎の骨など、感染部位を切除するしか手が無くなります。

また、コレステロール低下剤は、幅広く使用されていますが、感染症を重症化しやすくします。特に危険とされているのがスタチン剤です。この薬は、コレステロール(細胞を作る材料)だけでなく、コエンザイムQ(エネルギーを生み出す)やドリコール(細胞の構成や識別に必要な物質)などの身体にとって重要な物質の精製を阻害します。コレステロールは、私たちの筋肉や血管・内蔵など、あらゆる組織を作るための材料になります。コレステロールは、健康を維持するのに、とても大事なものです。不足すると、身体の組織がもろくなります。また、神経細胞も正常に働かなくなり、免疫も弱り、ウイルスやガン化した細胞を排除できなくなります。身体の炎症も治りにくくなります。新型コロナ感染症でも、重症者ほどコレステロール値が低いとの報告があります。

また、持病のある人には、様々な薬剤が使われています。免疫力を抑制する薬やACE2を増やす薬は、感染や重症化を促進します。新型コロナウィルスは、私たちの身体のACE2という酵素を受容体と

して侵入してきます。ACE2というのは、体内に炎症が起こると修復のために増えてくる酵素です。ステロイドや抗がん剤、アトピー性皮膚炎の人が使うプロトピック軟膏など、免疫を抑制します。高血圧に使用する降圧剤のARBやACE阻害剤(アンジオテンシン系)カルシウム拮抗剤やARBは、免疫力も抑制してしまいます。糖尿病に使用するアクトスも同様にACE2を増やします。ほかにも、睡眠剤や安定剤、抗リウマチ剤など、多くの薬剤の危険性が指摘されています。(詳細はとて書ききれません)

このように、新型コロナ感染で重症化、死亡といっても、背景には複雑な要因が絡み合っています。注意喚起されることもありません。自らで身を守っていくしかないのです。

※1 アセトアミノフェン以外の非ステロイド抗炎症剤は、免疫を落とし病状を悪化させます。(アセトアミノフェンといえども危険性はある)また、ライ症候群(脳症)を発症する危険性も高まります。ところが、厚労省は、6月下旬、イブプロフェンやロキソプロフェン、ボルタレン、アスピリンなどの市販薬でもOKという公示を行いました。(アセトアミノフェンの品薄回避のための緊急措置として)本来なら、医療逼迫を防ぐために解熱剤の使用をやめさせるべきところです。これから、自宅療養者が、高熱の恐怖から、これら薬剤に走ることになるのでしょうか。そうなると、病状を悪化させ重症化や死亡というケースも増えてくることが予想されます。

薬剤で、病気を癒やすことはできません。逆に、生体を防御する反応(症状)が抑えられてしまいます。そのため、内に秘めた回復力を阻害し、病状を悪化させることになるのです。

ワクチンは感染を防げない

多くの人が、漠然とした疑問を持っていると思います。インフルエンザワクチンを打った人がインフルエンザにかかり、打っていない人がかからない...また、新型コロナにしても、ワクチン接種が始まってから感染者が激増している。

では、なぜ、ワクチンは感染を防御できないのかです。ウイルスは、鼻や喉、気管支など粘膜から入ってきます。それを抑えるには、粘膜細胞で働く抗体

(IgA)を誘導しなければなりません。しかし、ワクチンは、抗原を筋肉注射しますので粘膜組織に抗体はできません。したがって、感染の防御はできません。

では、ワクチンは、発症を抑制できるのかですが、そういうエビデンスもありません。ウイルスが感染して身体に入ってくると、すかさず細胞内に潜り込みます。そうすると、抗体は、ウイルスを認識できなくなります。それで、今では、「重症化を防ぐため」と謳い文句が変わってきたのです。しかし、それも、確固たるエビデンスはありません。都合のよいデータだけを寄せ集めて、科学を装っているだけです。

こうした非科学的な報道や宣伝は、日々、メディアから垂れ流しされています。(ワクチンに限らず)繰り返す耳にする私たちは、大きな錯覚を植え付けられることとなります。外力(注射や薬など)によって、内因(いのちの働き)を高めることができるという錯覚です。しかし、外力によっては、内因を強引にねじ曲げることはできません。したがって、身体(内因)には、内部応力が生じ、全体のバランスは崩れることとなります。つまり、外力によって、身体の機能を高め、全体を整えていくことはできないのです。外力(環境や条件など外因)の本質を理解し、ニセ科学に騙されないようにしましょう。

明石家さんまさんが、「MBSヤングタウン土曜日」で、新型コロナワクチンを接種しない意向を表明しました。明石家さんま65歳、ワクチン打ちたくない理由は「打ったら体が変わってしまう」今年7月で66歳になるさんまは、「66年間、一回も(ワクチンを打ったことが)ないんですよ。ここでワクチンを打つと、体が変わってしまうので俺は打たないって(決めている)」と述べた。

さんまさんの言う「身体が変わる」という表現は的確です。では、身体は、どう変わっていくのでしょうか。ワクチンは、身体を長期的な免疫抑制状態にします。そのため、感染症を抑えられないようになっていきます。異物を接種することで、アレルギー(アナフィラキシー)体質に変わっていきます。自己免疫を狂わせ、自己免疫疾患の危険因子を抱え込むことにもなります。(がんや糖尿病、心筋梗塞、脳梗塞、リウマチ、うつなど、あらゆる病気の原因になる)ワクチンが製薬会社のドル箱(病気を際限なく増産する)といわれる所以です。

ワクチンで感染者が増える

最近、下記のような記事が話題になりました。

気象予報士の依田司氏、コロナデルタ株感染…一時はワクチン副反応と勘違い、検査で感染判明(2021年6月29日 スポーツ報知)

依田は24日に新型コロナのワクチン接種。その後、発熱して「サタデーステーション」を欠席。「ピーク時には一般に副反応として挙げられていない「激しい咳、痰、肺の違和感」があったため、救急病院にて診察とPCR検査を実施したところ、29日になって感染力が強いとされる「L-452R変異株(インド株)陽性」と判明した。「保健所との聞き取り調査では、濃厚接触者無しとのご判断で、感染経路不明」としている。(後略)

コロナ陽性の団長安田「ワクチンの副作用と思っていた」感染思いもよらず(2021年7月15日 日刊スポーツ)

松竹芸能によると、団長は9日に1回目の新型コロナワクチンを接種したが、13日に番組ロケを前にPCR検査キットにて検査をしたところ「高リスク」の結果を示したため、翌14日に発熱外来を受診し、新型コロナウイルスPCR検査を受けた結果、陽性と診断されたという。

20日、自身のツイッターを更新。新型コロナウイルス感染から数日、肺炎になっていたことを明かした。(後略)

このようなブレイクスルー感染(ワクチン接種後の感染)は、今、世界中で起こっています。(カリフォルニアの病院では、接種後に60名の医療スタッフが感染し1名が死亡など)今後、さらに増えていくことは間違いありません。そこで、ファウチ氏(米国立アレルギー感染症研究所所長)が、ワクチンの3回目の接種を公表しました。

なぜ、こんなことが起こるのでしょうか。今、メディアでは、ワクチンの効果を盛んに宣伝しています。ワクチン接種で抗体価が上がるのでワクチンは効くと...それを皆、信じこんでいるわけです。しかし、抗体の量が増えたところで感染を防げるわけではありません。接種したところで、感染はするし、感染源にもなるのです。他人に感染させないためとか、集

団免疫を獲得するためというのはナンセンスです。ワクチン接種率が100%になっても集団免疫はできません。

逆に、感染者を増産することにつながります。やっかいなことに、接種した本人は、ワクチンの効果を信じ込んでいます。そのため(安心感があるため)、感染防止にも無頓着になります。感染にも気づきにくく、人との接触の機会も増えます。それは、接種が進んでから感染者が増え続けている現状をみればよく分かります。

これから、ワクチン接種も3回4回...と続いていくこととなります。とうぜん、身体のほうはポロポロになっていきます。遺伝子ワクチンは、ウイルスの一部(病原性のある遺伝子)を体内に接種して、私たちの体内で自己増殖させるというものです。そのため、体内に強い炎症が、持続的に引き起こされることとなります。現代人の多くは、食事や環境汚染、農薬、薬剤、サプリ、健康食品など、様々な要因で免疫抑制状態にあります。そこに、遺伝子ワクチンは致命的で、様々な疾患を生み出すことにもなります。また、遺伝子ワクチンで産生される抗体が、本来の抗体の産生をブロックしてしまいます。そのため、コロナ変異株など、感染症を防御できなくなります。簡単にいうと、自然免疫が壊されるわけです。しかも、生涯にわたり影響します。したがって、ワクチン接種者が増えれば増えるほど感染者も増えるわけです。

ワクチン効果の誤解

コロナ2度目感染のしずちゃんにネット動揺「改めて不安」「ワクチン接種しても感染するの?」(2021年7月28日 スポーツ報知)

2度目のコロナ感染報道に、ネット上でも驚きの声広がっている。「2回目ワクチン終了後、医師に『ワクチン打っても感染する。症状が出ないだけ。だから、他人に感染させないようにマスク等対策必須』と言われたよ」...(後略)

この報道は、あるテレビ番組でも取り上げられていたのですが...コロナに感染しても、軽症では抗体も無くなりやすく、二度の感染もありうると...それに比べ、ワクチンの効果は高く、感染を防止できる...

と例のごとくワクチン(抗体)効果の宣伝に終始していました。(しずちゃんがワクチン接種後の感染だということは隠して)

こうした間違ったメッセージが、世間に大きな誤解を広げています。(メディアとしては、それが狙いなのですが)大きな誤解は、「抗体=免疫」ではないということです。抗体というのは免疫の一部でしかありません。また、血液中の抗体量と感染を防御する力(中和活性)に相関関係はありません。そもそも、免疫が正常な(抑制状態にない)人は、自然免疫(好中球やマクロファージなど食細胞)が働きます。抗体などの免疫記憶は必要ないのです。

抗体というのは、ウイルスが人の細胞に感染するのを阻止するためのものです。なので、抗体価が上がるとウイルスの感染を予防できるとされています。でも、免疫システムは、そんな単純にはできていません。抗体といっても、様々な種類があり、対象のウイルスを阻止できる抗体が増えなければ意味がありません。したがって、抗体の有無に関わらず、感染する人、しない人がいるわけです。

新型コロナワクチンで、懸念されているのが、抗体依存性感染増強と呼ばれている現象です。(悪い抗体が、感染や重症化を促進する)本来、抗体は、ウイルスから体を守るはずのものです。でも、その抗体が、免疫細胞などへウイルスが感染するのを促進するケースが生じます。そして、その免疫細胞を暴走させ、症状を悪化させます。ワクチンで、良い抗体ばかりができるとは限らないのです。これは、現行のウイルスに限った話ではありません。現行のウイルスを阻止できる抗体が、変異株(または従来株)に対しては、抗体産生を邪魔する場合もあります。

獲得免疫には、この抗体(液性免疫)とは別に、細胞性免疫というのがあります。(NK細胞やT細胞などリンパ球が主役)この細胞性免疫は、自然感染により発達します。細胞性免疫は、病原体に対して、直接、攻撃をしかけ排除します。また、細胞性免疫では、細胞内に潜り込んだ病原体も排除できるため、抗体より重要と考えられています。(抗体は、病原体が細胞内に入ると認識できなくなる)細胞性免疫は、流行しているウイルスに対する予防だけでなく、変異型にも有効です。

また、ワクチンには、様々なものが含まれています。なので、接種を続けると、添加物や変性タンパク質(※2)が身体に蓄積していきます。そして、免疫抑制の状態が続く、炎症のコントロールが難しくなります。つまり、免疫力が弱まり、様々な感染症にかかりやすくなるのです。エビデンスも多く発表されています。

たとえば、インフルエンザワクチン接種(2017~2018)によって、新型コロナ感染症のリスクが36%高まることが報告されています。(2020年のペンタゴンの研究)

また、世界の39カ国における150万人以上におよぶ大規模調査では、65才以上において、インフルエンザワクチン接種率と新型コロナ感染による死亡率に相関関係があることが明らかにされています。前年度のインフルエンザワクチン接種率が高い国ほど、新型コロナ感染症による死亡率が高いのです。

※2 変性タンパク質

変形した異常なタンパク質のことで、細胞内(小胞体)に取り込まれると細胞死を起こします。

アルツハイマー等の神経変性疾患、がんなど、様々な病気に関与していると考えられています。

ワクチンの重篤な副反応

そして、もっと深刻なのは重篤な副反応です。メディア等では、ワクチン接種で重篤な副反応は起こらないとされています。(公式には、アナフィラキシーは10万人に1人)しかし、実際には、たくさんの死者や重症者が出ています。

ワクチン接種後に死亡6人に 接種との因果関係は不明 (2021年7月15日 琉球新聞社)

県内で新型コロナウイルスのファイザー社製のワクチン接種後、副反応が疑われた人のうち、6人が死亡したことが14日までに分かった。12日にあった県の新型コロナ感染症対策本部会議で報告された。県は接種と死亡の因果関係は不明としている。県は6月に副反応の疑い23件のうち、死亡2件、免疫が過剰反応を起こすアナフィラキシーなどの重い症状7件を発表しており、新たに4人の死亡者が追加された。

ワクチン接種後「死亡事例751件」厚労省が21日の副反応検討部会に報告 前回から195件増(2021年07月22日 日刊ゲンダイ)

厚生労働省は21日、新型コロナワクチン接種後に死亡した事例が16日までに751件に上ったことを明らかにした。同日開催の新型コロナワクチンの副反応を検討する専門家の合同部会に報告した。7日の前回報告では556件だった。

751件の内訳は、米ファイザー社製接種後に死亡した事例746件、米モデルナ社製5件。2月17日から接種がスタートしたファイザー社製は11日までに663件、12日から16日までに83件の報告があった。5月22日から接種が始まった米モデルナ社製は11日までに4件、12日から16日までにさらに1件が報告された。

専門家の評価は、米ファイザー社製が11日までの663件を対象に行われ、因果関係評価 α β γ のうち「 β 」(ワクチンと死亡との因果関係が認められないもの)3件、「 γ 」(情報不足等によりワクチンと死亡との因果関係が評価できないもの)660件。米モデルナ社製は11日までの4件について行われ、いずれも「 γ 」だった。

ワクチン接種は、副反応については政府が十分に補償すると公言して始まりました。ところが、誰ひとりとしてワクチンとの因果関係は認められなかったのです。ワクチンは、重病で今にも死にそうな人には打てません。(そんなことをしたら、それこそ殺人です)健康な人が接種後に、突然死するのでですから普通はワクチンを疑います。

原田曜平氏「大問題」父ワクチン接種後の副反応、厚労省にいまだ報告されず(2021年6月22日)

マーケティングアナリストで信州大学特任教授の原田曜平氏が、自身の父が新型コロナウイルスワクチン接種後に重篤な副反応により入院したことについて、病院側から厚生労働省への報告がされていないとし、事情説明を求めた。

原田氏は22日、ブログを更新。「ある心ある政治家の方が調べてくれた。昨晚現在、まだ父の副反応が厚労省に報告されていないことが判明。病院が報告をあげていないそうです。もうすぐ二ヶ月経っちゃう」と書き出し、「これは大問題だと思います。病院は公益性の高い組織です。ワクチン接種は国

民事事であり、そこで出た副反応は公益情報。それをこれだけ遅れても出していない、下手すると未だに出す気がない、という状況は遅延では許されません」と訴えた。続けて、「いまだにこの議員が病院に問い合わせても、個人情報を出さず、仕方なく厚労省経由で把握する、という極めて無駄なやりとりになってしまっている模様」と状況を説明。「ちなみに、この病院は都内の超有名病院」とし、「至急僕に連絡し、法令違反の事情説明と場合によっては取材を求めます。それがいい場合、公益のため病院名を公表します。どうかご検討下さい。心からのお願いです」と呼びかけた。

原田氏は先月13日にツイッターで、80代の父がワクチン接種後、40度近い高熱が出て体の一部が腫れ上がるなどの症状に見舞われ、救急搬送されたことを報告。病名はワクチンの副反応による多形滲出性紅斑と蜂窩織炎と診断され、現在も入院が続いている。

このように、ほとんどの副反応は、厚労省(副反応疑い報告制度)へ報告されることはありません。厚労省では、原則、接種後28日までの重篤な有害事象については、因果関係を問わず報告することになっています。でも、その条件には、「それが予防接種を受けたことによると疑われる症状」という逃げ道が付け加えられているのです。米国のワクチン有害事象報告制度(VAERS)でさえ、報告されるのは実数の1%くらいと言われています。メディアでも報道されることはありません。したがって、ワクチンとの因果関係も究明されることはありません。また、医師側からの注意喚起もありません。死亡する危険性があるとは口が裂けても言えないのです。私たち接種を受ける側は、周りに流されず、事実を目を向け、判断していくしかないわけです。

ワクチンと突然死

米国黒人層“ワクチン拒否”猛拡大 アーロン氏急死で深刻化(2021年1月27日 日刊ゲンダイ)

米大リーグの英雄ハンク・アーロンさん(享年86)の急死が、米国の黒人層に波紋を広げている。アーロンさんは今月5日にモデルナ社のワクチン接種を受け、「私はとても誇りに思う」と語った。その17日

後の22日に死亡。「自然死」との報道もあるが、死因が正式に発表されていないため、ワクチン接種に疑念が持たれている。

アーロン氏は、黒人の間にワクチン接種を奨励するため、ワクチンの初回接種を1月5日に行いました。(黒人層には過去に人体実験の歴史があり根深い医療不信がある)その様子は、現地のニュースで報道されました。ワクチンは安全というメッセージを送るはずが、17日後の22日に睡眠中に死亡してしまいました。

ワクチン接種と、乳児突然死症候群との関連は、疫学的調査で指摘されています。ヒブワクチンは2008年12月から、肺炎球菌ワクチンは2010年1月から開始されました。その後、相次ぐ突然死が起こり、2011年3月に接種が一時中断されました。これを契機に、法医学解剖による検証が行われました。乳児突然死症候群と診断された50例を検討し、32例でワクチンの接種が認められました。うち7例は、死亡の7日前にワクチンの接種を受けていたことがわかりました。また、双生児がワクチン接種後、同じ日に突然死することも多数報告されています。こうしたことから、ワクチン接種と突然死との関係は相当に深いと考えられています。(これらも例のごとく、ワクチンとの因果関係不明とし、乳児突然死症候群として片付けられている)

では、なぜ、ワクチン接種後に突然死が起きるのかです。乳児突然死症候群は、何の予兆や病歴のないまま、突然死亡してしまうという病態です。睡眠中に呼吸が止まってしまうのです。普通は、血液中の酸素が欠乏する(二酸化炭素が増える)と、苦しさを覚えて自発的に呼吸を行います。脳の呼吸中枢から「しっかりと呼吸をしなさい」という指示が出されるわけです。ところが、免疫抑制状態の人が感染症にかかると、炎症状態が続き、呼吸中枢に障害をうけてしまいます。そして、その指令が途切れて呼吸が止まってしまうわけです。

これは、薬剤(タミフルや睡眠剤など)によっても起こることが知られています。ワクチンも同じです。ワクチンを接種すると、毒素を排除するための炎症反応が起こります。炎症を起こさせる物質を炎症性サイトカインといいます。炎症性サイトカインが、脳の毛細血管の細胞内で、炎症を起こさせる物質(プ

ロスタグランジンE2)を作り、脳内に放出します。それが、延髄にある呼吸中枢を障害して呼吸を抑制し低酸素状態が進むことで、呼吸が止まると考えられています。例のごとく、ワクチンとの因果関係は否定されていますが、あまりにも無理があります。

ワクチンと血管障害

中日・木下雄介投手がワクチン接種後に「重篤」危機 専門家は「接種を忌避しないで」と訴え (2021年7月28日 デイリー新潮)

中日ドラゴンズの木下雄介(27)投手が、現在、予断を許さない状況であることが週刊新潮の取材で分かった。7月半ばに倒れ、長く病床に伏しているという。若きアスリートの身に、一体、何が起こったのか――。

木下投手は2016年秋のプロ野球ドラフト会議で中日から育成選手枠1位の指名を受け、将来を囑望されていた一人だ。

「木下はコロナのワクチンを接種したばかりでした」と語るのは、さる球団関係者だ。

「接種から数日後、彼は名古屋市内の練習場でかなり力が入った激しい運動をしていました。その最中に倒れ、大学附属病院に運び込まれたのです。容体は現在、重篤で……」

声を詰まらせて続けるに、

「まず心臓周辺に問題が発生し、その影響が脳に及んでいます。人工呼吸器を外すこともできません。奥さんが付きつきりですが、ショックを受けておられて気安く声をかけられるような雰囲気ではない。この事実を知っているのは、与田剛監督はじめ首脳陣と、ごく限られた一部の選手だけです」

「非常に厳しい状態だとは聞いています」(後略)

(木下雄介投手は、8月3日に亡くなりました)

これに対して、

ともすればワクチン忌避感情を助長しかねないこの一件。東京歯科大学市川総合病院の寺嶋毅教授は、過度に接種を恐れる必要はないと指摘する。「ワクチンの恩恵をもっとも受けるのは高齢者ですが、20～30代の若年層であっても重症化する危険性や後遺症に悩まされるリスクがそれなりに存在する以上、接種のメリットは大きいと言えます。また、ワ

クチンは自身の感染を予防しながら、それを通じて周囲への感染拡大を防ぐという効果も期待されています。家族や大切な人たちを守ることを考え、また自らが感染を広げる一因とならないためにも、やはり接種は推奨されるべきでしょう」

厚生省は、6月4日までの新型コロナワクチン接種後に死亡した196人を公表しました。この中で、医療従事者と推定されるのは、31人でした。(女性17、男性14)うち出血性脳卒中は、女性10人、男性1人、合計11人でした。(くも膜下出血8人、脳内出血3人)中には、くも膜下出血で死亡した26歳の女性もいました。

これに対して、

「ワクチンを打ったあとにたまたま脳出血を起こした可能性が高く、因果関係の誤解釈でしょう」

残念ながら、これが今の医療界の現実です。これら、無責任極まりない冷酷な言葉にショックをおぼえました。科学的態度のかけらも見いだせません。科学的認識というのは、そもそもが科学的(客観的)ではありません。主観的手段を用いた相対的認識にしすぎません。科学は、「その人の心にあるものしか認識できない」という原則の上に成立しているます。したがって、謙虚にならざるを得ないし、決めつけはできないのです。

さて、これらワクチン接種者は、現役で働く健康な人たちです。なので、死亡率は、一般の人より低くなるはずですが。

上記の死亡者数を統計的に処理すると...

(年齢層は20～74才)

医療従事者の女性の出血性脳卒中の死亡率は... 一般では4.5%です

ワクチンを接種した場合は59%となります。

また、医療従事者の男女合計の循環器疾患(脳卒中や心筋梗塞、心不全など)の死亡率は...

一般では22%です

ワクチンを接種した場合は84%となります。

(データは、医療ビジランスセンター)

では、なぜ、ワクチンを接種すると血管内皮が壊れるのでしょうか。くも膜下出血は、くも膜下にある太い血管の動脈瘤が破裂して出血が起こります。脳内出血は脳内の小血管にできた動脈瘤が破裂して出血が起こります。

遺伝子ワクチンは、脂質ナノ粒子にmRNA(設計図)を封入し筋肉注射します。mRNAは、体の各所に運ばれて、細胞内にスパイクタンパクを作ります。そうすると、免疫機能が異物と判断して排除にかかることになります。(スパイクタンパク自体もサイトカインを放出し血管に炎症を引き起こす)そして、血管の内面に傷がつき出血します。また、傷の周りに血栓ができるとう梗塞を起こします。

怖いのは、このような重篤な血管障害だけではありません。無症状でも、血管に障害を受けている可能性もあるのです。血管の内皮細胞は、入れ替わらない(傷は治らない)ので深刻です。爆弾を抱えこむことになるのです。でも、本人は、そのことに気づきません。ワクチン成分の脂質ナノ粒子は、ポリエチレングリコールできています。これは、細胞同士を接着する性質があり、あらゆる細胞にへばりつきます。

たとえば、卵巣です。卵巣には、卵子に栄養を送り込む毛細血管が張り巡らされています。ワクチン成分は、そこにも入り込んでいくのです。そうすると、卵巣や卵子に障害を与え、不妊になってしまう可能性もあるわけです。そもそも、この遺伝子ワクチンは、卵細胞や新生児、遺伝的な影響など検証されていません。

これから、若い世代へのワクチン接種が本格化していきます。若い人たちもワクチンの本当の怖さを知りません。メディアの流す根拠のないデマを信じ接種が広がっていくことでしょう。

若い人たちの血管は動脈硬化などを起こしていません。(炎症状態にないため、新型コロナの受容体になるACE2が少ない)また、若年層は、免疫力(自然免疫や交差免疫)も減衰していません。(風邪を繰り返し引く子ども時代から年月もあまり経ていない)したがって、感染や重症化もしにくいのです。後遺症に悩まされるリスクもほとんどありません。また、子供が感染して、学校や家庭で感染を拡大させるというエビデンスもありません。ワクチン接種の副反応として取り上げられるのは、アナフィラキシーや発熱など接種直後の反応だけです。(真実から目をそらすために)でも、本当に怖いのは、健康な人が、身体に爆弾を抱え込むことになるということです。

ワクチンで免疫の病気に

遺伝子ワクチンは、皮下注射ではなく筋肉注射です。薬剤を注入するだけなら皮下注射でいいはず...それを、なぜ、危険な筋肉注射にするのかです。「危険な」というのは、ワクチン成分が、筋肉から神経を伝って、脊髄、脳へと侵入(逆行性軸索輸送)する恐れがあるからです。

筋肉に注射するのは、筋肉内に薬剤を留めて強い炎症を起こさせるためです。(それで、赤く腫れたり痛みが出る)このように、免疫を誘導するには、あえて炎症を引き起こす必要があるのです。

従来型の不活化ワクチンでは、不活化した(死んだ)病原体を接種します。不活化した病原体では、毒性が弱く免疫が反応しません。そのため、わざわざ毒素成分をワクチンに入れます。毒素成分には、アルミニウムやスクアレン乳液、ホルムアルデヒドなどがあります。防腐剤もかねて、メチル水銀やエチル水銀なども使用されます。これらの毒素のことを免疫賦活剤(アジュバント)といいます。

ワクチンの成分が身体に入ってくると、細胞が破壊されて死んでしまいます。その時に、細胞内の成分(リン脂質、ATP、DNAなど)が漏れ出します。これら成分は、ゴミになりますので処理しなければなりません。そのゴミを掃除しようと食細胞が働きます。これが、炎症の状態です。この炎症が免疫を誘導し、目的の抗体が産生されるわけです。

ところが、このゴミ処理がうまくいかない場合もあるのです。そういう場合は、食細胞が過剰に刺激され、制御不能になります。そして、自らの身体の正常な組織まで排除してしまうことになります。その結果、関節炎などリウマチ症状を引き起こすことになるわけです。

また、上述した不活化ワクチンに添加されているアジュバントですが...これらは、身体に害を与える毒素ですので、すみやかに排除しなければなりません。こうした毒素の粒子は、極めて微小(ナノ粒子)です。それら粒子を、マクロファージなど白血球が食して掃除します。一部は、リンパ管から血中に入って全身に運ばれます。そして、たどり着いた先々で炎症を引き起こすのです。(筋肉痛や関節痛、全身倦怠感、筋力低下、慢性疲労、発熱など)

また、アルミニウムを食した白血球は、脳の血液関門もくぐり抜け脳にも送られます。そして、脳で炎症を引き起こすことで、自閉症など脳機能障害を誘発します。また、アルミニウムは、アミロイドタンパク質の蓄積を促進します。そのため、アルツハイマー病発症の危険性もあるのです。このような免疫賦活剤により発症する病態を、アジュバント誘発制自己免疫疾患と言っています。

また、最近、ワクチン接種で不妊や流産になるということが取り沙汰されています。胎盤を形成するタンパク質とスパイクタンパク質の構造(遺伝子配列)は酷似しています。そのため、自己免疫が、胎盤のほうをスパイクタンパク質と勘違いし、攻撃してしまう可能性がでてくるのです。そうすると、胎盤の形成が妨害され、不妊や流産につながる恐れが生じてきます。デマとして打ち消しにかかっていますが...その理由は、遺伝子配列が完全に一致しないためということです。希望的観測でしかありません。本当のことは、まだ分からないのです。人体実験と言われている所以です。

同様の自己免疫疾患で、現在、多数報告されているのが、身体に麻痺が現れるギランバレー症候群です。(過少申告が問題視されている米国の有害事象報告制度でさえ多数の報告がある)これは、自己免疫が、末梢神経の組織を抗原タンパクと勘違いしてしまうことで起こります。呼吸器官などが麻痺すると死亡にまで至ります。

また、自己免疫疾患には、発作性睡眠(眠り病)というのがあります。急に意識を喪失し脱力してしまうため、車の運転中に発作が起こると命取りです。これは、脳の細胞(オレキシン受容体)が、自己免疫に攻撃されたことで起こる病態です。このように、攻撃対象になる組織によって様々な疾患が発症してしまうわけです。

生命システム(免疫はその一部)は、あらゆる要素が複雑にからみ合って機能しています。この精妙な仕組みは、とても今の科学のレベルでは把握できません。(全体の関係性を無視し部分しか見ない現在科学では)そこに、浅知恵(形式論理)で設計されたワクチン(対症療法)で切り込んでいくのです。あまりにも無謀な行為です。想像を超える不都合が生じてくるのは当然です。

ワクチン騒動の歴史

一昔前まで、インフルエンザワクチンは、集団接種が行われていました。(学童:1962年~/3才~15才:1976年~/)でも、その効果は、ずっと疑問視されていました。毎年、予防接種を続けながらも、インフルエンザの流行は収まらないのです。それに加えて、脳障害など重大な副反応が相次ぎ、訴訟も起こってきました。(1964年~/)また、脳の慢性炎症(自閉症や癲癇など発達障害)の問題も表面化してきました。そして、種痘や三種混合ワクチンなども同じように、訴訟が起こるようになってきました。

こうした中、群馬県の前橋市医師会が集団予防接種の中止に踏み切りました。(1979年)そして、前橋市医師会が中心となって調査が行われることとなります。この調査は、75,000人を対象に、1980年から5年間にわたる大規模なものでした。その結果、ワクチンを接種してもしなくても罹患率や超過死亡率は変わらなかったことが明らかになりました。

(カンガルーネット <http://www.kangaeroo.net/>)

また、日本のインフルエンザ対策は、世界的に見ても特異でした。そこで、1980年にCDC(米国疾病管理センター)による調査が行われました。その結果、集団接種がインフルエンザ予防に有効だという証拠は見つからない、との報告がなされました。これらを契機に、市民運動が巻き起こり、1994年に集団接種は廃止されました。

このように、ワクチンの被害は、今に始まったことではありません。数多くの方が泣き寝入りを余儀なくされてきました。今回は、従来とは、まったく異なる遺伝子ワクチンです。以前から多くの危険性が指摘されながら強引に接種が始まりました。一般の人が人体実験に参加することになったわけですが、終息の目処が付きません。社会は、今、集団催眠状態に陥り、收拾が付かない状態です。ワクチン接種後の死亡者数も日に日に増え、919件になりました。(7月30日現在の報告数)例のごとく、ワクチンとの因果関係は不明とされています。したがって、ワクチンを中止するための根拠にもなりません。戦争のように、被害が目に見えて広がるというものでもありません。ひとり一人の健康をひそかに蝕んでいくのです。気がついた時は手遅れなのです。